

今回は、全体としてアイデアは買えるものの、そのアイデアを生かすだけの構成や文章が追いついてない、という作品が少なからずという印象でした。そうした中で、優秀賞の「郵便物泥棒とひるねうちゅうじん」は、アイデアはもちろん、展開にも意外性があって、楽しませてくれました。ただ、突っ込みどころも結構あって、それらをクリアすると、かなり切れ味のよい作品に仕上がると思いました。ということで、ちょっと具体的に修正点を考えてみます。

まず冒頭は三人称というか、いわゆる神様視点で状況を提示し、そこから一人称に転換して、ストーリーが始まります。その書き出しは「友人は宇宙人らしい」ですが、ここは「友人」ではなくて「あいつは宇宙人らしい」としてみたら、どうでしょうか。この方が一人称に転換したということがよりはっきりしますし、その後も「いつも陽気な友人が思い詰めている」より「いつも陽気なあいつが思い詰めている」のほうが、二人の親密な間柄にぴったりな気がします。

それから、この作品は、台詞のやりとりのおもしろさも持ち味になっていますが、そこももう少し緻密に計算してほしい。例えば、最初の「なあ、谷田んこの息子どうや？」から始まるやりとりですが、これだけしょっちゅう会っているわけですから、「慧くん」と呼ぶのが普通ではないでしょうか。実際、谷田の方は「八重ちゃん」と名前を読んでいます。そういうところの一つひとつの積み重ねが、リアリティを生んでいきます。また、会話だけが続くような場合は、誰の台詞かがわかるように、そして文章の起伏を作るためにも、適宜地の文をはさむことも大事です。例えば、「覚えてるか、俺が宇宙人やって話したの……」で始まるやりとりは、会話文だけが八回続きます。そこを、例えば谷田の「俺とその話広めた地球人代表のお前で切腹や」の後、すぐ〈僕〉の台詞にしないで、【せ、せっぷく？ 切腹？ それはないだろう。それにしても、随分古風な罰だな】とでも心の中で思わせておいて（一人称ですから、そこは地の文になります）、台詞は「じゃあ、あの時から、俺は命を狙われているってことか？」というふうにでもすれば、〈僕〉がこの谷田の意外な話にめんくらっているという情景が、より読者に伝わると思います。自分の作品に距離を置いて読み直していくというのはとても難しいのですが、それがある程度できるようになると、作品はまちがいなくグレードアップします。

佳作になった「水面下のダイヤモンド」もユニークな作品でした。水の中の生き物を擬人化して展開させていきますが、その生き物たちの世界を描くというよりも、それを通じて外来種の問題を考えさせるストーリーになっていて、こういう物語の作り方もアリだなと思わせるものがありました。ただ、例えば「学校」がカメだけの学校なのか、他の生き物たちも一緒なのか等、この世界の設定をより緻密にする必要があると思いました。